

令和元年6月11日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03403

研究課題名(和文) 現代中国語圏文化における逸脱の表象

研究課題名(英文) Representation of Deviation in Greater China Today

研究代表者

濱田 麻矢 (HAMADA, MAYA)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：90293951

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀以降の中国語圏文化を対象に、性別役割(ジェンダーロール)と国家/国民想像(ナショナルイメージ)という二つの規範がどのような関係を結んできたか、またこの二つの規範に回収されない「逸脱の表象」がどのように生起し、伏流的な発展をとげてきたのかを問うた。研究の対象となったのは20世紀後半、日中戦争期以降に書かれた文芸作品及び舞台作品、映画、連環画である。主に従来の抗日/革命ナショナリズム中心の文学史では取り上げられなかったジェンダー規範に焦点を当て、ナショナリズムとマスキュリニティ、母性、性的暴力などとの関係について多様な角度から切り込んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀後半における小説・詩・演劇・映画・連環画などの分析を通じて、中国現代文学研究の「規範からの逸脱と性別の関係」という新たな概念を提起することができた。この時代、文字文化の絶対的優位が揺らぎ、映画、舞台、詩朗唱など、前近代においては「通俗的娯楽」として切り捨てられてきた非文字文化が大きな力を持ち始めた。折しも戦争の世紀、それらの行動的芸術はナショナリズム振起のための大きな力となったことを確認した。

「書く」「話す」という一種の権力の行使は、多くの場合「男性性」「女性性」という規範化されたジェンダーロールと結びついてきたが、その「規範」を乗り越える逸脱のエネルギーを検討することができた。

研究成果の概要(英文)：This research project examined how the relationship between the two norms, gender roles and national image, were depicted and how the representation of the deviation which could not be collected to these norms was created and developed potentially.

We focused on various literary works such as novels, plays, films, and manga in the late 20th century. We especially investigated the gender norm which had not been discussed in conventional literary history that emphasized anti-Japan or revolutionary nationalism and we researched various topics such as nationalism, masculinity, motherhood, and sexual violence.

研究分野：中国現代文学

キーワード：中国におけるナショナリズム ジェンダー 規範からの逸脱

1. 研究開始当初の背景

本研究は、20世紀以降の中国語圏文化を対象に、性別役割(ジェンダーロール)と国家/国民想像(ナショナルイメージ)という二つの規範がどのような共犯関係を結んできたか、またこの二つの規範に回収されない「逸脱の表象」がどのように生起し、伏流的な発展をとげてきたのかを問おうとしたものである。中国大陸、台湾、香港のほか、東南アジアや米国の華人社会をも対象として、ジェンダーロールとナショナルイメージの変容を多角的に検討することを目指した。

2. 研究の目的

20世紀以降の中国語テキストについて、以下の3点を明らかにすることを目的とした。

(1)文芸作品(小説、映画、演劇など)に描かれた性的役割から、逸脱的表象の歴史を社会史と付き合わせながら明らかにすること。

(2)従来の性的役割から逸脱した文芸的表象が、当該社会における支配的言説、さらにはナショナルアイデンティティによってどのように相互に影響を及ぼしあったのかを分析すること。

(3)こうしたマージナルなカウンターナラティブと、作家の越境志向との関係について検討すること。

3. 研究の方法

(1)内部の研究会を年に一、二回開き、研究成果・資料情報を共有するほか、国内外からゲストを招いてワークショップを行った。

(2)中国にて資料調査及び現地の研究者との研究交流を行い、学会発表した内容はできるだけ活字化し、複数言語での発信を目指した。

(3)国内の学会にパネル参加をし、本研究課題の重要性について広く知ってもらった。

4. 研究成果

(1)主な研究成果

三年間に及んだ本研究課題において、学術論文8本、学会発表37本、著書9冊(共著、翻訳を含む)を得られた。以下、具体的な研究課題について獲得した知見を述べる。

日本語による「台湾蕃地」描写について

植民地台湾を描いた中村地平の日本語作品は、宗主国である帝国が周縁の植民地台湾に対して捏造した南方憧憬の延長線上に位置づけうるだろう。そこには宗主国と植民地、男と女、セクシュアリティの表象とそれに欲望する軍国主義構造などの二項対立がみられる。反モダニズム的文学の樹立を目指したという点でその叙事は興味深いが、宗主国と植民地、男の従属物としての女などという点は、軍国主義構造における普遍的概念から逃れていないし、辺境に残る原始的な純粋さに救いを求めるというのは新中国の中国

文学にも見られる現象である。しかし坂口禰子の「霧社」をめぐる叙事はそこから脱却し、「蕃地」に暮らす女を見る「私」と「私」を見る「蕃地の女」が等価に描かれているのは注目に値する。

近代中国演劇における女形のセクシュアリティについて

日中戦争時期に評判を呼んだマルチメディア作品『秋海棠』は、京劇の女形を主人公とする愛国の物語である。男旦の女性性はバトラーのジェンダー・パフォーマンス・パフォーマティヴィティの理論などと符合するところがあるが、それをジェンダーの構築、伝統劇におけるパフォーマンス、叙事における描写という3つのレベルからテキスト叙事に引きつけて読み取る必要があるだろう。また、秋海棠の葉はしばしば「中国」の化身とされてきた。それと同名の芸名を持つ彼が男性として女性性を演じるのは、中国人がナショナル・アイデンティティをどのように想像するかという点と符合する。つまり「男性-男性のなかの疑似女性-女性」における権力関係は、「西洋(帝国主義)-中国男性-中国女性」と同じ構造になっているということがわかる。民族主義の主体意識は男性のセルフ・イメージに潜在的に依拠してきた一方、女性は民族主義の文脈で客体化の対象となる。その意味で秋海棠の「半主体半客体性」は非常に興味深い。また『秋海棠』原作は1940年代の通俗小説であり、物語がどのような広がりを見せたのかという点に注意する必要がある。そこにはエリート作家の純文学作品とは違う大衆化されたイデオロギーが想像されていると思われる。

母性と妓女イメージの交錯について

知識人男性の描く女性像の建前と内実が矛盾している点には注意を払うべきである。「産まない女性」が若いうちは共闘できる女性と見なされるが、ずっと単身であったり妓女であったりすると、「規範から外れた女性」ということで憐憫/侮蔑の対象となるからくりで注意しなければならない。実は、こうした知識人男性の視点から自由だったのが、曹禺や老舎の描いた妓女像であり、侮蔑された妓女への崇敬や、男性側の本音と建前を暴露する視点が両者の妓女像には見られるのではないか(その試みは夭折したけれども)。

また、女性イメージと国家の関係について扱うとき、女性の身体と結託しているものが国家なのか、民族なのか、無産階級なのかに注意を払わねばならないだろう。時期によって歴史観や民族主義の位置づけが異なることに慎重になる必要もある。また、革命模範劇の身体が脱身体的・脱個性的な、いわば身体なき身体なのだとする、文革後の林白の小説にまた性的な意味づけが付加されるのは、崇高な革命の背後にある性の衝動というものを見出せるという点で興味深い。さらに『紅岩』や映画『戦火中の青春』の中の女性像のように、「母性」をあらわす女性像についてどのように考えるのが今後の課題となる。

キャンオン作家茅盾における男性性の葛藤について

身体と精神の両面における「不能」と「健全」の枠組みが、いわゆる史的唯物論とどのように関連するかは大変興味深い問題である。社会や性に関する様々な理論が翻訳され、さまざまな価値観が混在していた民国期文学で、「不能(無能)」男性と有能で活潑な女性の組み合わせがどのように評価されたのかについては、許地山「春桃」や李劫人「死水微瀾」など、茅盾以外の他の現代作家作品についても考えてみる必要がある。

さらに作品の背景にあるもの（例えば農民の描き方についても、作者と共産党の複雑な関係が影響していた可能性がある。

「書く女」に向けられた眼差し

張愛玲の代表作「金鎖記」長安は「ヒロイン七巧に人生を台無しにされた娘」として論じられてきたが、それは「結婚できなくなった女」は「可哀想」というバイアスに基づく感情なのではないか。ヒロイン七巧が愛ではなく金を選んだのは自分の意思によってである。その娘長安は、学校生活を手放し、恋愛結婚を放棄した。それが母の圧力によるものだとしても、彼女は自分自身が生きていけるだけの財力を持ったし、曖昧なラストによると自分自身の欲望も持ち続けている。彼女を「不幸な母の犠牲者」と捉えるのは、異性を愛し、愛されない女は不幸だというステレオタイプに読者が縛られているだけなのではないだろうか。これについては老舎「駱駝祥子」との比較を考えてみるといいかもしれない。祥子を墮落させた女として嫌悪されるフーニウだが、彼女は自分の意思で愛する人を選び、飛び出したという点で魯迅「傷逝」のヒロイン、子君と通じる存在である。彼女の罪悪は「はっきりとした欲望を持っており(彼女の執着は「愛情」ではなく「肉欲」としか表現されない)、年をくっていて、醜い」ことに集約される。それが咎められるべき「逸脱」だったということに注意せねばならないだろう。

(2)国内外における位置づけとインパクト

「規範からの逸脱と性別の関係」という考え方については中国における現代文学研究で目にしたことはなかったが、今回の研究課題を通じて北京大学、武漢大学、香港教育大学などとセッションを組むことができ、「脱範と性別」という新しい用語を用いて問題意識を整理することに成功した。代表者は本研究課題を基礎として国際共同研究を企画中であり、今後はこの課題を東アジア各国の近代化と結びつけて大いに発展させてゆく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8件)^[SEP]

小笠原 淳、坂口れい子の「蕃地」書写 日治時期台湾日人作家書写中的山地女性形象、日本統治期の台湾の女性 文学創作における山地女性表象の生成について研究会報告論文集、査読無し、号数無し、2019、1-9^[SEP]

濱田 麻矢、少女中国序説 女学生のビルドゥングスロマン、未名、査読有り、36、2018、25-45□

三須 祐介、林懷民「逝者」論 「同志文学史」の可能性と不可能性をめぐって 立命館 法学、査読無し、6、2018、603-636□

田村 容子、男旦(おんながた)が脱ぐとき 中国演劇における乳房の表現、乳房文化研究会 2015 年度講演録、査読無し、2015 年度版、2016、125-145

濱田 麻矢、崩れる塔、萎れる花 張愛玲後期作品における愛のかたち、野草、査読有り、99、2017、30-54

〔学会発表〕(計 37件)

HAMADA Maya, A Girlhood in Taiwan under Japanese Rule: Yang Qianhe and Her Age, Encounter of Human and the Sea in the Maritime Asia, 2019^[SEP]

MISU Yusuke, Lin Hwai-min and Taiwanese Tongzhi Literature, 第 206 回 JSPS-MUFJ セミナー、2019

濱田 麻矢, 民国少女の大冒険 学んで書いて、恋して産んで、 帝国 日本をめぐる少女文化、^[SEP]2019^[SEP]

濱田 麻矢, 少女中国 中国少女の成長小説、華語語系文芸中の“脱範”想像、2018^[SEP]

田村 容子, 不懷孕の身体:中国文芸中の“母性”与“妓女”之形象、華語語系文芸中の“脱範”想像、2018^[SEP]

三須 祐介, まなざされる「男旦」と近代中国のナショナル・イメージ、華語語系文芸中の“脱範”想像、2018

小笠原 淳, 中村地平の南方憧憬と台湾表象 その初期作を中心に、華語語系文芸中の“脱範”想像、2018^[SEP]

白井 重範, 茅盾作品中の男性特質諸相 以“無能”与“健全”為中心、華語語系文芸中の“脱範”想像、2018

濱田 麻矢, 倒掉的塔、枯萎の花 張愛玲晚期風格窺探、漂泊与越境、2017□

田村 容子, 台湾時期的齊如山、漂泊与越境、2017□

三須 祐介, 從『秋海棠』到『紅伶淚』: 現代中国文芸作品中的跨界与男性形象的“漂移”、漂泊与越境、2017□

白井 重範, 20世紀左翼文学中的非主流傾向 “異化”及其他、漂泊与越境、2017

小笠原 淳, 試析台湾蕃地中の“蕃女”形象与恋情故事架構、漂泊与越境、2017

HAMADA Maya, Shifting Hierarchies: An Analysis on Mei Niang's "Emigrants", Trans-Literary Experiments: Cultural Transformation and Social Change in Modern East Asian Societies, 2016

〔図書〕(計 9件)^[SEP]

濱田 麻矢, 花書房、『春水』手稿と日中の文学交流、2019、255(169-180)

^[SEP]田村 容子, 中国文庫、男旦(おんながた)とモダンガール 二〇世紀中国における京劇の現代化、2019、406□

小笠原 淳, ミネルヴァ書房、教養の中国史、2017、200(100-125)

田村 容子, ミネルヴァ書房、中国文化55のキーワード、2017、298(24-28,76-79他多数)

濱田 麻矢, 岩波書店、中国が愛を知ったころ(翻訳)、2017、184□

田村 容子, 関西学院大学出版会、中華文化スター列伝 ドラゴン解剖学竜の子孫の巻、2016、222(183-195)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:三須 祐介

ローマ字氏名:MISU, Yusuke

所属研究機関名:立命館大学

部局名:文学部

職名:准教授^[1]_{SEP}

研究者番号(8桁):60339653

研究分担者氏名:白井 重範

ローマ字氏名:SHIRAI, Shigenori

所属研究機関名:國學院大學

部局名:文学部

職名:教授^[1]_{SEP}

研究者番号(8桁):40365507

研究分担者氏名:田村 容子

ローマ字氏名:TAMURA, Yoko

所属研究機関名:金城学院大学

部局名:文学部

職名:教授

^[1]_{SEP}研究者番号(8桁):10434359

研究分担者氏名:小笠原 淳

ローマ字氏名:OGASAWARA, Jun

所属研究機関名:熊本学園大学

部局名:外国語学部

職名:准教授^[1]_{SEP}

研究者番号(8桁):70634137

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。